
花に託して

ゆかた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花に託して

【NZコード】

NZ8686

【作者名】

ゆかた

【あらすじ】

ヘタリア
APH一次創作

/ 英日 / 国名表記

日本は手にした鉢植えに優しい視線を投げかけながら、足早に道を急いだ。

行く先は、先日からイギリスが滞在している旅館の一室だ。本来ならば洋風のホテルの方が良かつたのだろうが、彼が自ら古式の宿を希望したのだ。日本の文化を知りたいと言つてくれた言葉が嬉しくて、宿の女将にそのまま告げれば、それならばと料理に接待にとずいぶん手を尽くしてくれているらしい。楽しそうに日々のやりとりを報告してくれるイギリスがなんだか無性に可愛らしかった。

これも喜んでくれるでしょうか、と日本は手にした鉢に咲く花に唇を落とす。まだ朝露に濡れた花びらはみずみずしく、可憐な花びらをいっぱいに広げて、太陽の光を弾いていた。

木香薔薇と呼ばれるそれは、古くから日本で栽培されている薔薇の一種だ。花は小振りな姿ながらも八重に花びらが折り重なり、小鞠のような愛らしい姿を楽しませてくれる。残念ながら匂いはほとんどないのだが。

育成が早い花だけにこうして鉢に行灯仕立てとなつているものは珍しい。偶然に手に入ったものだけにぜひ彼に見せたかった。薔薇は彼の国花だ。花 자체は珍しいとは言い難いかも知れないが。それでも、少しでも喜んで貰えたら、と。

そう思い、彼にその花を手渡したのだが。

鉢を受け取つたとたん、イギリスはわずかに口元を引きつらせ、そのまま言葉もなく固まつた。

あまりの様相の変化に、日本は戸惑いながら彼の表情を伺つた。顔色が悪い。なんだか、一気に責ざめたような感じさえする。一体どうしてしまつたのだろう。

日本が鉢植えを渡した途端のことだから、おそらく原因はそこだ

るつ。彼の国には何か鉢植えにタブーでもあったのだろうか。例えば、日本で病人に鉢植えを贈るのが根付くことを意味する故に忌避されるようだ。

「……イギリスさん？ どうかなさいましたか？」

「……日本、これが……お前の気持ち、なのか」

暗い声だった。まるで、この世の終わりを告げるかのよう。さて、一体どうされたのでしょうか。花を見て、『気持ち』とは。確かに、それは日本の気持ちだった。日本が原産ではあるし、珍しいかもしぬないと思つた。何よりそれは彼の国花だし、気持ちの慰めにもなるだろう、と。

しかしそれとは微妙に言葉の裏側に込められた気持ちが異なるような氣もする。

「気持ち、と言えば気持ちですが イギリスさん、この種はお好みではありますんでしたか？ 行灯立てが物珍しいと思い、お持ちしたのですが」

あれ、なんだろう。この人、今にも泣きそうですね。

鉢を握りしめた指先がわずかに震えていた。怒つているという風には見えなかつたが、どうやらなにやらショックを受けているようだ。

言動を別とすれば、彼の感情や思いは比較的素直に表面に表れてくる。突つ張つた言葉にさえ気をつけて惑わされないようすれば良いのだから、ある意味分かりやすい。

「べ、別に！ 別れを切り出されたのがショックだとか、そんなんじゃねーからな。ただ、どうせならこんな遠回しじゃなく 」

「は？」

『別れ』とはまたおかしなことを意味する。それとも、欧米では花を贈ることはお別れを意味しているのでしょうか？

それならば以後花を贈ることは厳に慎まなければなりませんがしかし彼の国でも花の栽培は盛んと伺っていました。そんなにお別れのために花を贈ることが多いのでしょうか？

その疑問はすぐに解決した。イギリスの言葉によつて。

「黄色い薔薇の花言葉は『別れ』だ。つまり、そういうことだらう？」

なるほど。花言葉。花に意味を託して贈るところアレですか。

「……それは、西洋の黄薔薇のお話ではありますか？　木香薔薇の花言葉は？」

「うつ應えよつとして、気がついた。そこそこ込められた言葉の意味なるほど」

それにはつまり、そういうことになるのだからつか、と。

思えば、国として物心ついてよりこの方、こんな風にお付き合つをするのは彼の国が始めてのことではなかつたか。

「花言葉は？」

「その、『初恋』です」

促されて、続きを告げた。

思わず仰ぎ見た先では、イギリスの顔色が変わっていた。まるで熟れたリンゴのように。西欧の方は肌が白い分、血が上つたときの色合いが鮮やかですね、などとどうでも良いことを考えて思考を迷す。それでもしなければ、自分の頬に登つた血の熱さを意識してしまつて、どうしようもなくなつてしまつたろう。

いたたまれない空気は、おそらくお互いのものだ。「ありがとうございます」とだけ告げられた言葉に、日本もただ「ありがとうございます」と頷いて応えるだけが精一杯で。

不器用なことだと口を笑いたいような、けれど同じような気持ちを彼の国もまた感じてくれているのだと改めて感じられたことが嬉しくもあり。

彼の手にした小さな花に、心の中でひとつお礼の言葉を告げた。

- end -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8686/>

花に託して

2010年10月21日23時35分発行